

現代詩における〈共同性〉の探究

—谷川俊太郎のばあい—

小山秀樹 小山典子 向山裕子
岡田 信 高野英朗 山元隆春

I 研究の動機・目的

- (1) 読むことの可能性、あるいは私たちは共同で読むことによつてどのような彼方へさらに進み得るか!?

私たちが作品を読み始めるとき、意識するしないにかかわらず、読む動機となりながら目的となつて居るものは、作品を読むことによつて生きる力(勇氣)を獲得することである。このことから自由になつて作品を読むことはできない。つまり私たちは作品を読むことによつて大小さまざまな自己における困難をその時代とともに乗り切つて来ているわけである。そして他ならぬその自己史をギリギリのところまで乗り切る限りにおいて、あるいは時代とともに乗り切る限りにおいて、私たちは友人とともに共同で

読み、生きる回路が開かれている。

作品の解釈にどのような正当性があるのか。また、違った形の読みも存在するのではないか。このような問いははずれも、個体の発するあらゆる問いのヴァリエーションにしか過ぎない。共同で読み生き続けることによつて、このような閉じられた問いは開かれるのみである。そして友人とともに読み続けることで得る生きる力(勇氣)はそれらの問いを沈黙に追いやるかもしれない。それはそれでよい。

もはや作品の課題や関心は、その作品の中だけにとどまつてはいない。それは私たちをめぐる課題と関心である。そして私たちは共同で読み続けることによつて作品の課題や関心を遠い一点で私たちに重ね合わせることができ、しかしそのときその一点は私たちの目の前にあるのである。どの作家も同時代を共同で読み、

書いたという事実が、私たちにそのような体験を可能にさせている。

かつて私たちは多くの作品を読み(あるときは書き、発行し、あるときは制作し、上映し)、こうしてこの現在の地点までやって来た。未来へかけて共同性を追求していくこと、自分を変え人を変えながら読み、書いていくこと。今回谷川俊太郎の作品に勇氣づけられながら進めていった会合や作業はどのように自分に変えていけたか。谷川俊太郎自身のロマンと手をつなぎつつ。

(2) 谷川俊太郎の詩における〈共同性〉への志向

谷川俊太郎の詩の群れを、私たちがここでとりあげる理由はひとえに彼の詩のことは、谷川その人の思いを語りながらも絶えず何らかのものをことばによって分かちあおうという願いを有していると思われるためである。

研究の出发点となったのは、「かなしみ」という詩であった。

あの青い空の波の音が聞えるあたりに

何かとんでもないおとし物を

僕はしてきてしまつたらしい

透明な過去の駅で

遺失物係の前に立つたら

僕は余計に悲しくなつてしまつた

このときの〈僕〉は、何を求め、何を得られずに(悲しくなつてしまつた)と云うのだろう。〈僕〉が犯したあやまちは、〈何かとんでもないおとし物〉をしてきたという一点に尽きる。何もかを喪つたという悲しみこそが第一連では語られている。人間として存在してしまつたがゆえに喪われたもの。それを言いあらわすために用いられた〈とんでもないおとし物〉とは、何だかわからない、喪つたことではか実感されえないものの喩えにすぎない。喪つた何かが問題なのではなく、存在することで何かを喪つてしまつたということが悲しいのである。

この詩はそこでは終わらない。第二連の最終行〈余計に〉が妙にひっかかってきた。〈おとし物〉をしただけで、それに気がついただけで、じゅうぶんに悲しいのに、この〈僕〉は〈透明な過去の駅〉の〈遺失物係〉の前に立つとうとする。〈おとし物〉をした人間が〈遺失物係〉の前に立つとき、〈おとし物〉をした彼にはそのことがよけいにリアリティを持ったものとして感じられてくるわけである。だから文字どおりに〈余計に〉悲しいというのであろう。

だが、この詩の〈僕〉はそういった〈かなしみ〉を自らの手ではらそうとはしない。いわば〈かなしみ〉の現実に向面して、そのことを〈悲しんで〉いるばかりである。しかし、後の谷川はどうであろうか。私たちは、谷川という詩人が「二〇億光年の孤独」という処女詩集の題名に象徴されるような〈孤独〉感から抜け出そうとする宮みを追いかけていってみたいという欲望にかられた。谷川俊太郎という一人の詩人が、その天性によって直感し

た一種の〈孤独〉感から、詩人として成長していくにつれて、ことばによる〈共同性〉を志向しながら、脱皮をくりかえしていったのではないか。それだからこそ現に彼は詩を書きつづけ、その詩が私たちに新しい風を送り込みつづけているのではないか。そういう仮説が私たちにはあった。

谷川俊太郎が、他者と何ものかを共有するために詩を書き、世つないほど何かを求めていたという事実を、その詩行のうちに読み取ることは不可能なことではないだろう。彼の記す〈私〉の変容はすなわちその〈私〉における〈他者〉の求め方の変容でもあった、と私たちは考える。それゆえ、私たちは、〈私〉〈僕〉〈わたくし〉といった一人称代名詞に、谷川俊太郎の自己が反映されているとみなし、各時期における谷川の代表的詩作品のなかで、そういった一人称代名詞に投影された谷川の自己がどのような変容を被ったかを探っていきたいと思う。

おそらく、谷川俊太郎という詩人の個性は、〈私〉意識から〈私たち〉意識へと成長を遂げていったにちがいない。そしてそれは、この詩人に対する方法意識の変容過程とも軌を一にしているように思える。詩人は何のために何を求めて詩を書くのかという、根源的な問いかけに、論理のみをもって答えるのではなくて、谷川は詩という方法の模索をおして答えていったのだと言えるのではないだろうか。たったひとりのものでしかない自らの魂を、ことばを媒介として、すべての人々に通い合わせていく術はないのかという問題意識が、谷川にとっては詩作の源となっていたのではないだろうか。つまり、谷川は〈私〉という意識にこ

だわったのではなく、〈私〉という身体を通して、個から全体への意思の疎通を、詩というかたちで図っていったのではなからうか。それゆえ、谷川の詩集を時代順にみていくことで、彼のそういった〈共同性〉への志向の軌跡を明らかにすることができるのではないかと私たちは考える。

私たちには、この谷川俊太郎における〈共同性〉志向が、以前から私たちの求めていた、共同で何かを創りあげていこうとする志向と軌を一にするものに思われた。ことばによる〈共同性〉志向を谷川の詩における重要なモティーフとみなして、その〈共同性〉志向の姿を谷川の詩のテクストそのものから探り出していく営みを、私たちが共同で行おうとする意義もそこにある。

II 研究の方法・経過

私たち六名は、広島・愛媛・大阪と、場所を異にするため、各地でそれぞれ研究を進め、全員が集まる会合を持つ形で研究を進めていった。

「一九八七・三・七（土）〜八（日）於広島」

研究の対象を谷川俊太郎の詩とする。実際に私たちの手で鑑賞し、その読んだままの記録をもとにして、読むことの現在の問題を考えてみることにする。

具体的な作品として、

「芝生」「かなしみ」「ソネット41」「雲雀について」

の四編の詩をとりあげ、各自それぞれ八百字程度の鑑賞文を書

き、次の会合までに全員のを交換し合い、それぞれに考察し
ておくことを確認。

〔一九八七・五・三〇(土)〕三二(日) 於広島
再び四編の詩を全員で読む。

四編の詩において、〈私〉に対する意識が変化していることに
注目し、さらに谷川の詩集を時代順に取り上げ、読んでいきなが
ら、その折々の代表作を取り上げた。十一の詩集のなかでの
〈私〉の位相を分析・考察することを確認した。(その十一の詩
集の名称は、Ⅲに掲げる。

〔一九八七・七・四(土)〕五(日) 於広島

各自の分析の結果を持ち寄り、それぞれの詩集について考察す
る。「喪失感」を出発点として、詩集ごとに言葉・意味に対する
詩人の意識が変化していることに注目し、それぞれについて詳細
に分析・考察・討論する。

各自、谷川の詩の時代ごとの特徴をまとめ、次回の会合に持ち
寄ることとする。

〔一九八七・七・二二(水)〕二三(木) 於広島

谷川の詩集における各時代ごとの〈私〉の変容について各自が
まとめた文章を検討しあう。文章の表現・内容の吟味を行いなが
ら、ふじゅうぶんなところは考え直し、書き直しを求める。ここ
で検討したそれぞれの文章が、最終的な発表資料の母胎となっ
た。

〔一九八七・八・八(土)〕十(日) 於広島

発表資料作成。最終打ち合わせ。

〔一九八七・八・十一(火) 於広島大学教育学部大講義室〕
午後一時より、発表。

Ⅲ 研究の内容・資料

ここでとりあげる谷川俊太郎の詩集は次のとおりである。考察
の文章中で詩を引用するばあい、その詩がどの詩集に収められ
ているかを、次のように番号で示す。

- ① 『二十億光年の孤独』(一九五二年)
- ② 『六十二のソネット』(一九五三年)
- ③ 『落首九十九』(一九六四年)
- ④ 『旅』(一九六八年)
- ⑤ 『ことばあそびうた』(一九七三年)
- ⑥ 『夜中に台所ではきはきみに話しかけた』(一九七五
年)
- ⑦ 『定義』(一九七五年)
- ⑧ 『タラマイカ偽書残闕』(一九七八年)
- ⑨ 『コカコーラレスン』(一九八〇年)
- ⑩ 『日々の地図』(一九八二年)
- ⑪ 『手紙』(一九八四年)

また、これらの詩集以外の谷川の著作からの引用をするばあい
には、文章中にその著作の名を記すことにする。
引用するばあいは次のとおりである。

* 個々の詩句の一部を引用するばあい……………「」

*個々の詩の名を示すばあい……………「
*詩集名を示すばあい……………「

(1) 「二十億光年の孤独」 「六十二のソネット」

— 出発点としての喪失感 —

谷川俊太郎の第一詩集「二十億光年の孤独」には、「宇宙」を
意識した表現がいくつも見られる。

万有引力とは

ひき合う孤独の力である

宇宙はひずんでいる

それ故みんなはもとめ合う

宇宙はどんどん膨らんでゆく

それ故みんな不安である

(「二十億光年の孤独」①)

私は宇宙に存在し、私の抱く孤独・愛・不安といった感情はす
べて宇宙に起因し、支配されている。そして、私を支配するこの
宇宙はとてつもなく大きく、果てしない。その大きさ、果てしな
さ故に宇宙には不可解な部分が多く、私にとって未知な世界であ
る。このような不可解な宇宙に支配されている私は、いったいど

のような存在なのか。「かなしみ」(①)は、宇宙の中に存在す
る私を意識した詩である。

〈僕〉は今自分がひどく大きなおとし物をしてきたことに気が
つく。そして、そのおとし物は二度と自分の手に戻ってこないこ
とを理解する。こうした、何かを失くした感じ、どこかに落と
物をしてきた感じというのは、人が様々な場でふと思い描く感覚
であり、それは、人の存在に大きく関わっている。自分という存
在は、確実に何かを失くしてしまっている。その何かは決して自
分の手では埋めることのできないものだ。きっとこの宇宙のどこ
かに失くしたものはあるはずなのに、その宇宙が大きすぎて、不
可解で、手が届かないのだ。〈僕〉は自己の中のひどく大切なも
のを失くしたままの状態でこの宇宙に存在する。それは何なの
か、どこに在るのか、見つかるのか、こうした喪失にまつわる
様々な思いに揺れ動く。しかし、また、自分はこうした思いに左
右されながら存在するしかないのだという悲しき深い。

このような存在することの不安、悲しみは第二詩集「六十二の
ソネット」で少しずつ変容していく。

常に私が喋らねばならぬ

私について世界について

無智なるものと知りながら

(「11 沈黙」②)

〈私〉が無であることを知りながら、〈私〉を語り始める。

〈私〉がどのようにこの宇宙に存在するかを確かめるために、また、失ったことでできた空洞を少しずつ埋めていくため、〈私〉は語ってゆく。

私は私の中へ帰ってゆく

誰もいない

何処から来たのか？

私の生まれは限らない

([37] ②)

といった答の出ない問いを何度も繰り返しながら、私の何かを求めていく。語ることで、詩を書くことで、私の今の状況を確認し続ける。言葉を使って、眠り、泣き、微笑み、怒る自分を描き続ける。そこに表れたもの、そこそが私なのであり、そしてとにかくそれを「物語る人は私」([38] ②)なのだ。しかし、私のことがわかってくる一方で、私にはどうにもならないことも見えなくなる。

語ることで私の存在を確かめることはできて、やはり存在の不安そのものを消すことはできない。「41」に見られるように、他の空・樹があるがままの姿を現しているのに対し、〈私〉は曖昧な存在だ。人間の形はしているが、意識の中ではその人間であることから逃れようという思いがある。存在の不安を消し去るには、不安を意識する〈私〉を捨てるしかない。しかし、「私が去ると私の健康が戻ってくるだろう」からと推量の形で終わって

るのは、そういう「自分から抜け出したい」という思いもすでに私という意識にとりこまれていくことに気づいているからか。

詩集「六十二のソネット」では、「かなしみ」同様喪失感をもっているが、「かなしみ」がその失ったものの大きさに立ち尽くしてしまっているのに対し、自分の今の状況をありのままに描こうとする誠実さがある。

(2) 「旅」— 解釈との訣別 —

言葉、自分、世界。この三つのものの関係から生まれるジレンマ。このジレンマの中に身を置く谷川。

詩集「旅」を読む者はこの蟻地獄のようなジレンマの中でもがき苦しむ谷川の沈鬱な、誠実な魂に出会う。

語り、詩を書くことよって、自分という存在と世界を結び、自らが抱える喪失感を埋めようとしてきた谷川にとって、言葉はなくてはならないものであったろう。

しかしこの詩集「旅」において谷川は、言葉というものを自分と世界を遮るものとしてとらえており、そこに自分・言葉・世界にまつわる谷川のジレンマが生まれてくる。

「海というこの一語にさえいつわりは在る」(「鳥羽6」④)と書く谷川は、充ち足りて存在する「海」と自分との間に言葉を置く虚しさに嘔吐しているかのようである。

言葉はまるで防弾ガラスのように自分と海を隔てる。じかに自

分が全身で感じとっている「海」と、本当はじかにつながりたいのに眼前にそのまま在る「海」「嵐の前に立ち騒ぐ浪」(「鳥羽6」④)に対して、身体の奥底から沸沸と湧き出てくる熱い思い。その激情のままに「海よ……」と叫んでみても、自らが全身で感じていたものは、「海」というただ一つの言葉にのり得るものではない。数多く存在する言葉の中から、その瞬間に自分に一番ふさわしい言葉を選ぶことで、自分と世界の関係が完結してしまふのではない。眼の前の充ち足りてあるものを「海」とあたりまえのように自分の側から解釈して呼んでみても、そこに残されているのは、自分との熱いつながりの亡骸でしかないのだ。「海」と呼ぶことよって安心し、その海と自分との関係から去っていくには、あまりにも眼の前の現在が深く充ち足りて輝いている。

自分と世界の一断面を切り取るものとして扱うとき言葉は、自分と世界を結びつけるものではなく却って遠ざけるものとして立ちただかかってしまふ。

こうして谷川は、あらためて言葉というもの、そして世界、世界と向き合う自分をじっと見つめなおすのである。

私は目前の岩を眺める

松を眺める

眺めることに縋りつく

どんな表現への欲望もせず

何の詩もないのに

何の音楽もないのに

心にひとつのリズムが現れ

眼に涙が浮かばうとしている

(「鳥羽4」④)

この「ひとつのリズム」というもの。この「リズム」の中では大きなエネルギーが充ちつつあるのではないか。自分と世界とのバランスが極限にまで達し、その時どちらにも優劣はない。世界と自分が膚をびったりと合わせた状態。この緊迫した状態が、一つの言葉を生む。この言葉が生まれる瞬間においては自分も世界もない。とけ合っているのだ。

このような緊張状態から抜け出てきた言葉というものは、底知れない力を持っているのではないか。眼の前のもの(世界)を一個の人間が、自分と世界を結びつける過程において、これは、「〇〇だ」と解釈し与える言葉ではなく、世界と一個の人間の緊迫状態から生まれた言葉というものの存在を感じとるとき、谷川はとらわれていたジレンマの中でゆっくりと身を起こし始める。

そこにしか精神はない

たとえばどんなに疲れていようと

一本の樹によらず一羽の鳥によらず

一語によって私は人

(「anonym 1」④)

一個の人間と世界が緊迫状態を成した後は言葉そのものが持つ力に耳を澄まし、受肉された言葉に身を委ねること。それは充足した世界―「静寂」「無言」「沈黙」の中心へ至ることへの、谷川の限らない渴望の道でもあろうか。この詩集では「静寂」「無言」「沈黙」という言葉によく出会う。

言葉を推稿し

言葉に至る道はない

言葉を推稿し

この沈黙に至ろう

(「旅」④)

言葉そのものの力に身を委ねること―これは後の詩集『定義』などにおいて結晶化されていくものである。

(3) 「落首九十九」「ことばあそびうた」―伏流する〈私〉―

『落首九十九』において、その標題に表されている如く、話者である〈わたし〉は表に登場せず、〈わたし〉の囲りにある物事を批判したり揶揄したりするにとどまっている。『六十二のソネット』で露わにしていた〈わたし〉に対する問題意識は影をひそめている。それは、もちろんこの詩集の制作事情に大きく関わることではある。しかし、この詩集において、解釈や意味づけを行うう〈わたし〉自身を消し去ろうとする谷川の一つの方向性を示し

ていると言えないだろうか。〈わたし〉をカッコでくくり包み隠して、詩に表現する言葉自体を遊ばせようとする道である。

戦争は？―さあね

恋愛は？―まあね

結婚は？―かもね

人生は？―そのようよ

(「マイ・フェアレディ」③)

「人生は？―そのようよ」とうそがいているが、そのうそぶく〈わたし〉自身は問題にされていない。

次から次へと世界記録をつくってください

せめてカラダだけでも進歩してください

我が愛する人類よ！

(「記録」③)

にせ千円札は刷られつつける

ほんものの千円札も刷られつつける

台所にごきぶりは生れつつける

僕もあなたも年をとりつつける

(「つつく」③)

世の中にはこういう事実がありますという形で現実社会の状況を詩というワクで切り取って見せて、あとの判断や行動は読者の

良心に委ねているような感じだ。つまり、この詩集において谷川は、詩の表現を自立させるのではなく、読者の通念や社会の状況に寄りかかった形で表現を行っている。〈わたし〉を伏せていることは確かなのだが、詩の言葉自身に責任を持たせていないように思う。

〈わたし〉を伏せている点で『落首九十九』と一致するものの、『ことばあそびうた』においては、さらに、表現された言葉自体を実に楽しく遊ばせている。例えば、次のような詩がある。

まんまとにげた
ぐんまのとんま
たんまもいわず
あさまのかなた

(「やんま」⑤)

かっぱなっぱかった
かっぱなっぱいっぱかった
かっぱなっぱいっぱかった

(「かっぱ」⑤)

このように、意味を捨て去り言葉の世界に自由に歌い、遊んでいる。言葉自体、詩自体に責任を持たせた上で、読者と向きあっているのである。『ことばあそびうた』におけるナンセンス性は、〈わたし〉の存在にかかずらわっていた所から一步離れた形で詩作をするという一つの明確な方向を示している。そしてこの

二つの詩集の差はそのまま、解釈と訣別した「旅」における転換期の前後であるというそれぞれの位置を再確認させるものである。

(4) 『定義』「夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった」

— 〈私〉の定位 —

詩集『定義』における〈私〉は、〈物事〉に対して常にある距離を保っている。

言語によってそのものを記述する行為に、或るささやかな聖性を与えたいと望んでいて、私は一種の禁欲を自らに課さざるを得ないと感じている。

(「そのもの名を呼ばぬ事に関する記述」⑦)

この詩集において、〈私〉から他者への直接の呼びかけは無きに等しい。〈私〉のままざしは、記述していこうとする〈事物〉へと注がれており、その「記述する行為」は、みつめられている。〈事物〉そのものの現在を再現させるためだけに行われている。

そこでは、〈私〉という主体の一切の感情は削ぎ落とされておられ、在るものはただ目の前の〈事物〉を記述したいという行為の結果のみである。そういった主体の一切の感情を削ぎ落とそうとすることによって、〈言語〉そのものの持つ、人間の力ではどうすることもできない神秘的な属性を示すことを、この詩人はもくろん

でいる。

それゆえ、ここでの〈私〉は自らの感情を一切排除するばかりでなく、記そうとする〈事物〉に対しての価値判断をも削り取っている。

それは美しいのか醜いのか、私には断言できぬ。それが何であるのか、私はすでに読者に語っただろうか？

〔非常に困難な物〕⑦

なんでもないものを定義できぬ理由が、言語の構造にあるのか、或はこの文体にあるのか、はたまた筆者の知力の欠陥にあるのかを判断する自由は、読者の側にある。

〔なんでもないものの尊敬〕⑦

価値判断はすべて読者に任され、記述する〈私〉には自ら記述したものに言及する自由はない、と〈私〉は言う。〈私〉にできることは〈事物〉を再現する〈言語〉の群れを読者の前に提示することだけである。

しかし、そういった〈私〉の「禁欲」の姿勢が、ついには〈私〉そのものまでも〈事物〉として記述することを可能にしているのかもしれない。この詩集のなかでの〈私〉の特徴をもっとも端的に示しているのは、「疑い解剖学的な自画像」(⑦)と題された次のような詩である。

私は毒を食べた。私には金の詰物をした大白歯がある。私は名

前を知らぬ樹の若葉を見た。私には虹彩がある。私は合板に釘を打ちこんだ。私には上腕二頭筋がある。私はうる覚えの歌の一節を繰り返した。私には舌下小丘がある。私は中杉通りの空気の中にすれちがった女の化粧品の匂いを嗅いだ。私には亀頭がある。私は辞書を引きながら、いくつかの文字を書いた。私には指間球がある。私には何が重要なのかよく解らないので、私は私はと書きつづける。私には側頭葉がある。〔中略〕引用者〕私は死ぬまで私の膚であることを免れぬだろう。そのことが私に淡い眩暈を感じさせる私には蝸牛導管があり、それは地球の重力を介して、未知の屋間物質に接触している、私はいつか焼却炉で焼かれるだろう。一個の甲状軟骨を残して。

この詩は、〈私〉の〈行為〉を記述する。そしてその〈行為〉を可能にする〈私〉の身体の各部を列挙していく。だが、〈私〉の〈行為〉と〈私〉の身体とのあいだにあるものは、ここでは記されていない。〈私〉の〈意識〉と〈身体〉とが、この詩のなかでは見事なまでに二分されているわけである。〈事物〉を記すことで示された、対象に対する〈私〉の距離の取り方が、この詩のなかではきわめて明瞭なかたちをとってあらわれている。〈私〉そのものをも物化してとらえたこの詩は、「定義」という詩集で谷川の試みた、〈言語〉そのものの力を充溢させることの頂点を示すものとしてとらえることができるだろう。

また、「私は自分が正確に何者であるか知ることを拒まれていく。」や「私は死ぬまで私の膚であることを免れぬだろう。」と

いうことばは、初期の谷川の詩からみられた〈宇宙〉感覚を受け継ぐものであるとも考えられる。自らが何者であるかという問いに答えることなどはしよせん〈人間〉であるかぎりには不可能である、という確信が、「定義」という詩集における〈私〉の姿勢を決定しているように思われる。そのため、この詩集の〈私〉は、一切の感情を削ぎ落とし、徹底した〈媒介者〉の位置へひきさがったのである。そしてそれはまた、「旅」において、自分と世界との言葉との間で〈私〉がとらわれていたジレンマから導かれる、ひとつの帰結でもあった。

この「定義」とは、しばしば同じくして出版された、『夜中に台所ではばくはきみに話しかけたかった』という詩集は、「定義」とはまったく異なった方法で、言葉にまつわるジレンマを打開しようとする。この詩集の特徴は、その『夜中に台所で・・・』という書名に象徴される。つまり、この詩集にあつては、〈ばく〉からの何らかの他者への働きかけがテーマとなつてゐるのである。こゝでの詩人は、文字どおり「夜中に」ひとり紙と向かい合ひながら、〈ばく〉とは異なるだれかに向けて語るかたちで言葉を紡ぎ出している。

飲んでるんだらうね今夜も

氷がグラスにあたる音が聞こえる

きみはよく喋り時にふっと黙りこむんだらう

ぼくらの苦しみのわけはひとつなのにな

それをまぎらわす方法は別々だな

きみは女房をなぐるかい？

〔「武満徹に」⑥〕

この詩は、「武満徹」という相手を想定した〈独話〉のかたちをとっている。この〈ばく〉は、「一九七二年五月某夜」、「武満徹」という具体的な相手を思つて書きことばによる〈独話〉という行為を行ったわけである。もちろん「武満徹」がこの詩を読んだばあい、〈ばく〉との間に存在するある種の〈関係〉を思いながら〈ばく〉の語りに内面で応じることになるだろう。「武満徹」以外の読者のばあい、この詩を読んで、「ばく」と「武満徹」との〈関係〉を想像すると同時に、人間と人間との〈関係〉について、やはり思いを致さずにはいかないだろう。

なぜか。それは、この〈ばく〉が〈独話〉というかたちをとりながらも、なお、他者を求めているからである。〈独話〉でありながら、〈ばく〉の思いは自らのなかでの自己完結を志向してはいない。その思いのベクトルは明らかに自己以外の何者かへと向けられているわけである。この詩集に収められている詩群を読む読者は、その矢印の意味を考えることを余儀なくされる。

では、そのベクトルは何に向けられているのか。端的に言えば、それは、人間と人間との〈関係〉であり、人間同士の〈共同性〉だと言えよう。それを〈独話〉というかたちで、ことばによつて求めているところにこの詩集のなかの〈ばく〉の大きな特徴がある。しかし、その願いは明るい希望に満ちたものだというよりも、かなり苦吟に満ちたものである。その証拠に、たとえば、「一九六五年八月二日木曜日」⑥には、〈ばく〉の求めて

いたであろう〈共同性〉が破れたことへの悔恨の色が濃い。しかし、それだからこそこの〈ぼく〉はことさらにことばによる〈共同性〉への志回活動を行っているのではあるまいか。

このように「夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった」の詩群の大きな特徴は、それらがいたってプライベートな、〈独話〉型の文体であるということである。つまり、この詩集のほとんどの詩は実際に何らかの聞き手を目の前にして語られたものではない。〈独話〉のかたちをとりながら、そのことによつてなお、何らかの〈他者〉を求める姿勢を崩さずにいることで、この詩集の〈ぼく〉＝〈私〉は自らの身をおく場所をつかんだのである。このようなプライベートな文体をつかんだことによつて、谷川は新しい形でのことばによる〈共同性〉の求め方を探り当てたと言えるだろう。

この時期における谷川は、一方ではことばの持つ力を能うかぎりひきだすために〈媒介者〉の位置にひきさがることによつて（「定義」）、また一方では目前に存在しない〈他者〉へと語りかける文体を獲得したことによつて（「夜中の台所でぼくはきみに語りかけたかった」）、その詩における〈私〉を定位する術を探しあてたのである。

(5) 「コカコーラ・レックス」 「タラマイカ偽書残闕」

—私の定位 その後—

「コカコーラ・レックス」周辺の谷川俊太郎の詩を読むと、

「定義」以後の詩のスタイルが確信を深めることに気づく。自己の水位を低め、〈私〉を消しつつあった彼が彼の言葉とともに水位を増して来るイメージをそのスタイルと重ねて思い描くことは、間違っていない。

日々の暮らして目に触れるなんでもないものの、どれひとつとしてわれわれの生きている世界の全体と無縁ではないとぼくは信じていて、そういう無数の存在のからみあい、もつれあいは言葉の構造そのものであると同時に世界の構造そのものだ。詩の基本である連想とたとえとそして言葉の音楽性は、言語世界内での操作にすぎないのではなく、言葉によつて世界と距てられた人間をふたたび言葉によつて世界にむすびつける。

（「自作について」 「言葉を中心に」 一九八六）

谷川俊太郎は全てから自由になり、ただ言葉に拠ることを方法として世界と人間と詩を再生させようとしている。「versus 計画」 「一日」などの作品は、それらがカタログであることによつて、カタログ的世界の成り立ちと、カタログ的他者との了解の可能性を示しているのである。

思わず立ち上がりながら、彼は「そうか、海は海だってことか。」と呟いた。そしたら、急に笑い出したくなった。「そうさ、これは海なんだよ、海という名前ものじゃなくて海なんだ。」もし友人がかたわらにいたら、こんな独白は一笑に付せ

られたらどう。頭の隅でちとそんなことを考えながら、彼はふたたび呟いた。「ぼくはぼくだ。ぼくはいるんだ、ここに」そうして今度は泣き出したくなった。

(「コココーラ・レッスン」) ⑨

過剰な言葉の中で意味するものばかりがあふれて意味される実体が欠けている状態。その海の中を泳ぎ切り「そうか、海は海だってことか」と気づき、「ぼくはぼくだ。ぼくはいるんだ、ここに」と出会う。言い変えのきく言葉を使うより言葉との出会いに驚き、感動すること！谷川俊太郎は《私》が発する言葉を捨て、言葉自体を手に入れて感動とともに世界を構築していく。「コココーラ・レッスン」周辺の谷川の詩の言葉がどれも新鮮なのは、全ての既成の意味や音や概念を捨てた後に、言いかえのきかない自らのものとして意味と音と概念を削り出しているからである。そしてさらに言えば彼はやはりここでも言葉を削り出したのであった。

こうして谷川俊太郎が目前に抱えて詩作していく以前の彼の作品に色濃くあった他者との了解の問題は、「交合」という作品を生む。羊歯類との初めての交合を書いたこの作品は、その言葉の適確さによって彼の他者との了解の渴望を寓話として昇華させている。自前の言葉で全てを再構築していくことは、物語としての寓話を生むことになる。寓話として語ることに、この必然は「タラマイカ偽書残闕」を見れば明らかだろう。「IV（手の指のかぞえ

るもの）」は、この地点までたどりついた谷川俊太郎がその初期から持ち続けていた問題を決着つけているようにさえ感じられる。

魚は魚を産み

魚は魚の形を変えない

ゆえに魚は1と数えよ

忘れるな

在る数は1のみ

2より多い数はすべて

幻

(「IV（手の指のかぞえるもの）」) ⑩

既成の全てを捨てて蘇った彼の言葉は、全てを捨てたがゆえにその言葉に対応する現実としての寓話を持った。その寓話の行きつく先は、名のない魚どうしがどのように生き続けていくのかというところ、あるいは人間と羊歯類との交合がどのように「可能なか」ということ、あるいは僕と海とがどのように共生できるかということ、つまり、複数の人間がともに再生する物語である。

VI. 書き続けるということー「日々の地図」「手紙」ー

このようにして、私たちは私たちの読むという行為を重ね合わ

せながら、谷川俊太郎という詩人を、また彼の詩を辿ってきたわけだが、今回の共同研究という試みが私たちを彼の詩に、より深く関わらせてくれたという思いが、今ひととき強く感じられる。それは、一人で読むことによっては決して向き合うことのない現在というもの(言葉、意味そして生きるということ)が(彼の)言葉を通して浮かびあがってきたとでも言えるだろうか。あるいは、それは私たちをからめとる現在を、共同研究という方法の中で、言葉が経験を追いつくことなくひとつずつ知っていくという姿勢を、私たちが手に入れる過程であったのだとも言えるだろう。

谷川の詩における〈喪失感〉。それは初期の彼の詩において顕著なように、〈私〉が存在することによって既に失われ続けているものについての感情、またそのようにしてしか存在できない〈私〉についての感情であり、言葉(意味、部分)を沈黙(反意味、全体)に拮抗させ得ると信じた〈私〉の深い疲労のようなものであった。そのような中において、自己を言葉(意味)から解放せんとする行為——「私は宇宙以外の部屋を欲しない」(「ソネット41」②)、「私は詩人のふりはしているが詩人ではない」(「鳥羽1」④)。個の解消による解釈の拒絶によって〈喪失感〉を埋めようとする〈私〉は、ますます言葉(意味)に呑み込まれていくことになる。

この循環を乗り越えたのは、〈私〉の言葉についての認識の変容である。言葉をつくる〈私〉から、言葉によって創られた

〈私〉への、言葉を操る〈私〉から、言葉にからめとられている〈私〉への、そして言葉についての認識の変容が、〈私〉の在りようについての〈私〉自身の認識の変容であったことは言うまでもない。「落首九十九」にみられたような〈私〉と言葉との、〈私〉と世界とのむすびつき、在りようについての感じかたを、これ以降の詩から読むことはでない。

それ故、私たちは、ともすれば実験詩的な色彩が濃いとされる『定義』を、〈私〉が既に在る言葉を再組織することによって、自らの成り立ち、自分が言葉によって創られた在るということ、を、あやうい場所である手こたえをもって知ってゆく過程として読むことができた。また『夜中の台所』でばくきみに話しかけたかった」という詩(集)のひとつの言葉を、ごく自然にいとおしさを覚えながら読むことができた。「ことばあそびうた」における言葉(文体)の獲得もこのことと無縁ではないだろう。

そして、ここでは谷川詩の現在について考えてゆくのだが、言葉と自らの成り立ち、世界と自らの関わりについて深く考えることから出発し、自分を引き上げてきた〈私〉が、時折みせる疲労感——「疲労そのものを詩として生きようとするこっけいな努力」(「疲労」⑩)、「こんぐらがったみちです／もうほどけない毛糸」(「道」⑩)。ここには、言葉と戯れる、或は言葉によって世界を再組織しようとする〈私〉の姿をみとめることはできない。これらの言葉を前にして、私たちは読みの方法を失ってしまったのだが、やがてはかならぬ詩の言葉によって、私たちの言葉がいつのまにか私たちの経験を追い越してしまっただことに気づかさ

れることになる。

谷川の詩における〈喪失感〉はいかにして埋められたか。私たちはここで再びこの問いに向き合うことになる。言葉についての認識の変容によって、あたかも〈私〉が〈喪失感〉から逃れ得たかのような私たちの読みは次のように読みかえられなくてはならない。

言葉から（世界から、人間から）逃れようとする〈私〉と、言葉（世界を、人間を）経験によって深く知っていきこうとする〈私〉の態度の変更である、と。『コカコーラ・レックス』という詩集にある言葉のひとつは観念的なものと経験的なものとはさまで、〈私〉がそれらを手にしていく様子が、じかに私たちにつたわってくるものであった。従って、〈私〉の〈喪失感〉は既に埋められたものではなく、〈私〉が言葉に（世界に、人間に）対峙するとは語り続けることであり、谷川にとっては書き続け、動き続けることであつた。

「たとえ川は忘れられても／この街に人間の河は絶えない／たとえ祭はすたれようと／この街では人は人に出会いつづける」（『神田讃歌』⑩）——時にエネルギーを落しながらも、言葉を沈黙に拮抗させようという方向から、語り続けることによって言葉（世界、人間）に拮抗しようとする〈私〉に私たちは共感を覚える。〈私〉が言葉と一体化し、中空へフワリと浮き上がることが理想でもあろうが、たとえ〈私〉が最後に深い沈黙に閉ざされたとしても、いったい誰がそれを唾うことが出来るだろうか。

このような意味において谷川の詩は、読み手の現在における

〈共同性〉を追求するエネルギーの試金石のようなものだとさえはしないだろうか。

あなたは次の詩をどのように読み続けますか。

芝生

そして私はいつか
どこからか来て

不意にこの芝生の上に立っていた
なすべきことはすべて

私の細胞が記憶していた
だから私は人間の形をし

幸せについて語りさえしたのだ